

# SHOOTING EYE

シューティング・アイ

Express

## ONFILM

TAKESHI HAMADA, JSC



Photography © Photo.Kunst-Atelier ARIGA

僕達の仕事って、ある種のフィクションを作るための「たくらみ」だと思うんです。どれだけうまく観客をだませるかという。監督とかプロデューサーという主犯と、映画を作ろうとする集合体の中で、自分はその「たくらみ」の最高の共犯者でありたいと思う。

撮影って、やるのが毎回違うのがこの仕事の一番面白い部分ではあると思う。オペレーターの真髓というか喜びというか、覗いた被写体と何かが通い合うときがあって、小さなことだけど凄く面白い。それが醍醐味かもしれないね。

撮影監督は、映画制作の中で撮ることの責任を負う立場。作品全体が良くなるために、予算の配分を含め他の部門ともしっかり話す。どう撮ればいいのか常に考えている。

作品によって予算の大小はあるけど、低予算の作品であっても発想は貧しくしたくない。いつも、心豊かに仕事をしたい。

濱田 毅 (JSC) 撮影監督：滝田洋二郎監督の「僕らはみんな生きている」「壬生義士伝」、崔洋一監督の「血と骨」で日本アカデミー賞優秀撮影賞受賞。

また第81回アカデミー賞外国語映画賞受賞作「おくりびと」では日本アカデミー賞最優秀撮影賞を受賞。

**Q: ご出身はどちらですか？**

A: 僕は、1951年に北海道の岩見沢で生まれました。父は普通の会社員で、北見、留萌と北海道内を転勤をしていました。うちは僕が高校を卒業するまでテレビがなかったんです。その代り、本は少年少女世界文学全集とか、日本文学全集とか、たくさんありましたね。親は子供に本を読ませたかったのかも知れない。だから映像というと映画だった。高校の時には札幌に移っていて、その頃はもう映画にどっぷりはまっていたから、授業をさぼって映画館に通ったりしていました。フランス映画が好きで、トリュフォー、ゴダール、ルルーシュとかを良く観ていました。

**Q: 撮影監督を志したのはいつ頃で、きっかけは何でしたか？**

A: 20歳で上京して明治大学に入学して、バイトで学費を稼ぎながら生活していました。その頃、法政大学の映研の連中が遊び友達だったんだけど、その友達と、シアター夜行館というアングラ劇団の俳優4人と僕とで、入学した年の11月に北海道に1カ月、芝居の巡業に行っただけです。それで、東京に帰ってきたらバイトを首になっていて、仕方がないので行きつけの呑み屋に行って、おかみさんにその話をしていたんです。実は、その店のおかみさんは、当時の大蔵映画の人気女優さんで、「大蔵映画で撮影助手探しているからやってみたら？」と、紹介されて大蔵映画に入ったのが、撮影を始めたきっかけです。

**Q: 新人の頃に師事されたカメラマンはどなたですか？**

A: 大蔵映画に入った時、僕は全く撮影のことなんか知らなかった。それを、小野進 (JSC) さんが、「なまじ知っている奴より、何も知らない奴の方がいい」って言って呼んでくれて。今考えると小野さんが大恩人かもしれない。その頃、僕は何も知らない分、能書き言わないで色々スポンジのように学んでいた気がします。小野さんとはテレビも映画もたくさん一緒にやらせてもらって、本当に大先輩で人間的にも大好きな方です。

**Q: 尊敬するカメラマンは？**

A: 僕が師事した方と言うと、三船プロで助手をやらせてもらった斎藤孝雄 (JSC) さん。斎藤さんは、作品に対する考え方や物の見方が他のカメラマンと違って、とても冷静で落ち着いていました。あと、色んな新しいことを採り入れてやられていましたが、それでいてオペレートが見事なくらい物凄く上手い。相当優れた方です。あと、姫田真佐久カメラマン。僕は一度も付いたことも直接お話ししたこともないんですが、姫田さんの作品のカメラワークが大好きで。何て言うか、観る度にワクワクさせられるんです。

**Q: 撮影監督になられた頃のお話を聞かせて下さい。**

A: 大蔵映画のあと、三船プロにセカンドで入ったのが21歳の時でした。当時、三船プロのセカンドは24歳くらいのスタッフが多かったんです。そこでもし自分が本当の年齢を言ったら序列が出来てしまうので、年齢を3歳サバを読んで、周りには24歳と偽って入りました (笑)。入ってから3年経った頃に、そろそろ僕をチーフにしようという機運が周辺で高まってきて、実際は24歳という若さでチーフになりました。周りは26、7歳だと思っていましたが (笑)。三船プロでは、テレビを何百本もやったし、2時間ドラマも本編もやらせてもらいました。

1980年に、森崎東監督が『蒼き狼』という6時間もののドラマを撮る時に助手をやらせてもらったんです。中国ロケで、馬50頭のモブシーンを撮ったんですが、AカメラとBカメラは助手がついて丘で引きで撮っていて、僕はCカメラで馬の群れが僕に向かって走ってきてインアウトしていく画を下で撮ることになって…Cカメラは助手がいなかったので、録音のチーフを捕まえてフォーカスの送り方を教えて回し始めたんです。50頭の馬が僕に向かって走り出して、本当は僕の横を走り去るはずだったのに、馬は前が詰まると横に展開していくから、途中で群れが二つに分かれて僕は巻き込まれちゃったんです。でも、僕は望遠レンズで覗いていたから気付かなくて、急に馬がウワーって来て、気が付いたら僕もカメラも飛ばされていた。録音のチーフはとっくに逃げて。それで、蹄のこすった跡が体のあちこちに付いたんだけど、幸いなことに頭と腹を踏まれなかったんで無事だった。丘の上から見ていた他のスタッフは、もう濱田はダメだと思ったらしい。皆が駆け寄ってきたけど、僕は何ということもなかったの、砂塵の中をすっくと立ち上がったんだよね。

それに感動したからかどうかは分からないけど、森崎東監督は次の作品で僕をカメラマンに指名してくれました。29歳でした。

**Q: 撮影監督という仕事の最も好きな部分は？**

A: やることが毎回違うのが一番面白い部分ではあると思う。日本の撮影監督は、カメラのオペレートをするんですね。それで、オペレートの真髄というか喜びというか、覗いている被写体と何かが通い合うときがあって、小さなことだけど凄く面白い。それが醍醐味かもしれないね。

**Q: 映画制作において撮影監督の役割とは？**

A: よく「撮影監督は映画監督の女房役」とかモノの本に書いてあるけど、僕はその物言いが嫌いなんです。僕達の仕事って、ある種のフィクションを作るためのたくらみだと思っんです。どれだけうまく観客をだませるかという。監督とかプロデューサーという主犯と、映画を作ろうとする集合体の中で、自分はそのたくらみの最高の共犯者でありたいと思う。撮影監督は、映画制作の中で撮ることの責任を負う立場。作品全体が良くなるために、予算の配分を含め他の部門ともしっかりと話します。どう撮ればいいのか常に考えています。

**Q: 作品のルックはどう決めますか？**

A: 僕の場合、ルックから映画に入ったことはないです。こういうルックにしようかと最初に決めて作品に入った瞬間に間違える気がするんです。どういうルックにしようか、と考えながら、ロケハンに行ったり、衣装合わせしたり、監督やスタッフと時には酒を飲みながら話したり…そういう中でルックが見えてくる気がします。

**Q: これまでの作品で印象に残っているものを教えてください。**

A: 僕は撮影を志していなかったのに撮影をするようになって、「でもしか」みたいな流れで10年やっていたら29歳で若いうちにカメラマンになってしまった。だから、果たして自分にこの仕事が向いているのか、ずっとやっていけるのか、という自問自答というか、悩むというか、そういうものが常にあったんです。39歳の時、深作欣二監督の『いつかギラギラする日』でハードなアクションをやらせてもらって、それが物凄くきつかった。その後すぐ、滝田洋二郎監督の『僕らはみんな生きている』で75日間の海外ロケに入って、毎回状況が変わる大変な映画だったけど、一方で僕には凄く面白かった。それで、その2本が終わったら自信が付いて、僕の中で何も怖いものがなくなった。世界中のどこでも、どの監督でも、どんな作品でも撮れると思った。おそらく、それが変わり目だったのかもしれない。今振り返ってみると、その後の10年を何のためらいもなく走り続けるエネルギーをその2本の作品に貰ったと思う。充電できたような。でも人間は必ず放電して息切れするんです。僕らにとって充電というのは、結局良い作品で仕事をする事。50歳になって、『壬生義士伝』と『血と骨』を撮影して、またそこで10年走れるエネルギーをもらったと思う。ただ年をとると、充電と放電の期間がだんだん短くなってきて(笑)。今は作品を一つずつしっかりやらないとダメだな、とつくづく思っています。

**Q: 例えばデジタルカメラなどの新しい技術により、ご自身の仕事が変わりましたか？**

A: あまり変わっていません。カメラというのはツールに過ぎないと思っています。僕はフィルムのカメラが一番慣れているし、楽しいので、ほとんどの場合フィルムで撮影をしています。ただ、デジタルの作品も1本撮っていて、現場では支障なく撮れたと思います。ただ、フィルムの粒状性とかの特徴を再現するのに、デジタルで撮影して、ポストプロでフィルムルックに仕上げるというのは違うと思う。だったら、最初からフィルムで撮ればいいのに。デジタルでやるなら、デジタルのルックを追及するべきだと思う。ポストプロでのデジタルの仕上げというのは、今は当たり前だし、それはどんどん利用するべきでしょう。

**Q: 昔に比べて、今の人は視覚的に目が肥えていると思われませんか？**

A: 退化してるんじゃないかな？目は肥えてないけど、慣れてはいるかも。3.7インチのディスプレイで映像を見て、画を見る目が進化するとは思えない。僕らが映画を作る時は、やっぱりスクリーンで見てほしいと思って作っているし、僕と一緒に仕事をする人たちは、観客の想像力を喚起させてスクリーンの外側の世界まで感じてもらえるように映画を作っています。小型のディスプレイでは、そういう想像力は喚起されないと思う。

(2012年8月にインタビュー致しました)